

【論文】

横井時冬論

— 商人・職人を中心とした、もうひとつの「国史」研究の可能性 —

夏目琢史（一橋大学附属図書館研究開発室）

はじめに

戦前に東京商科大学（後の一橋大学）学長をつとめた上田貞次郎は、『商業史教科書』を書くにあたって次のように述べている¹。

本書（商業史教科書—引用者注）著述に際しては和漢英独の書に亘りて聊か渉獵する所ありしも常に座右に置きて参照せしはドクトル福田徳三氏が独逸に於て独文にて著はされたる「日本に於ける社会上及經濟上の發達」並に文学博士横井時冬氏の「日本商業史」なり。本書の叙述にしても多少科学的なら点ありとせばそは福田先生の惠なるべく、又もし資料の精確なるを得たりとせばそは悉く横井先生の賜なるべし。茲に謹んで両先生に対する甚深の謝意を表するものなり。



横井時冬

ここで挙げられている二名のうち、「ドクトル福田徳三」は有名である。上田貞次郎の師にあたる人物であり、彼についての論考は多い²。貞次郎が、福田に「謝意」を述べるのも納得できる。しかしもう一人の「文学博士横井時冬」はどうか。彼について知る人は、意外に少ないのではないだろうか。たしかに、横井時冬は、日本商業史研究の先駆者であり、経営史研究のなかでは大変有名である。しかし、明治期の日本史学者としての彼は、決してメジャーな位置にいない。同世代の歴史家、たとえば田口卯吉、白鳥庫吉、三上参次らに比べて、時冬の知名度はそれほど高くなく、いわゆる史学史研究のなかで注目を集めることもこれまでほとんどな

かった。その証左として、永原慶二『20世紀日本の歴史学』³や『20世紀日本の歴史家たち』シリーズ（刀水書房）などは勿論のこと⁴、史学史研究の基本テキストの一つである

『岩波講座 日本歴史』の岩井忠熊・北山茂夫両氏論文⁵、小沢栄一著『近代日本史学史の研究 明治編』⁶なども、時冬について触れていない。

本稿では、高等商業学校（1902年以降、東京高等商業学校に改称。後の一橋大学）教授であった横井時冬が、どのような学者であったのか、またどのような歴史学の構築をめざしていたのかについて、様々な角度から検討する。そしてそのことによって、明治期の「国史」研究において、東京高等商業学校がどのような役割を担ったのかについても明らかにすることをめざしたい。

1. 横井時冬の生い立ちとそのキャリア

日本商業史研究の草分け的存在である横井時冬（以下、時冬と略す⁷）については、これまでも、一橋大学の教員たちによって、その業績がたびたび紹介されてきた。まず、猪谷善一氏（東京商科大学教授）は、論文「日本商業史学の二先覚」⁸のなかで、東京高等商業学校の日本史教員であった時冬と菅沼貞風⁹の学問について検証を試みている。猪谷氏は、東京商科大学附属図書館所蔵の『商業志』（7冊）という史料（後述）が、菅沼貞風・時冬らによって編纂された可能性が高いこと、さらに、「横井氏の研究が菅沼氏より影響を受けし事は確実であらう」（p.107）として、とくに菅沼貞風の研究こそが時冬のそれに先行するものであることなどを指摘している。また、安丸良夫氏（一橋大学名誉教授）も、時冬の授業内容や研究分野について紹介した上で、次のようにその業績をまとめている¹⁰。

横井の歴史的関心は、作庭、茶道、書道、絵画などにも及ぶ広範囲なものであったが、その主要な関心事が広義の経済史ないし産業史にあったことは明らかなことであろう。いうまでもないことだが、横井には、社会構造や階級関係のような概念はなく、商業史や工業史の個別の歴史現象を、農業生産をも含めた包括的な経済構造のなかでとらえてゆくような発想にも乏しかった。横井の得意としたのは、右に本学所蔵貴重書中の論文名で記したような『札差考』『徳政考』『為替考』など（引用者注）それぞれの時代に顕著だった経済現象についての個別的な考証であり、この点では、横井の関心はひろく、ほとんど日本商業史の全領域にわたっていた。そして、その考証の手法は根本史料を博搜した手堅いもので、『日本商業史』と『日本工業史』は、こうした手法で得られた認識を一つの系統づけられた全体像へとまとめた実地的な知識の集成であっ

た。

これと同様、増田四郎氏（一橋大学元学長）も、時冬について次のように指摘している。

横井先生には、『日本商業史』、『日本工業史』、そのほか『日本不動産史』などの著書があります。また非常に感心するのは、鎌倉時代以後の日本の商売をしたときの商業文の書き方を集めたものもあります。こんな庶民生活の歴史は帝国大学ではとても教えない学問でして、これは画期的なことと思いますが、非常に実証的に史料を調べられて、一橋図書館の中に、横井先生が筆で書かれた東寺百合文書とか、高野山文書とかの赤罫紙の写本がまだ残っております。最後のところに、横井時冬が筆写したと書いてありますが、全部を自分で書かれたかどうかそれはわかりません。とにかくそういう日本史の原史料を丹念に集めておられることがわかります¹¹

文中の「一橋図書館の中」の「写本」の所在は確認できないが、後述するように、時冬が史料の採集に熱心に取り組んだことは間違いない。また、山田欣吾氏（一橋大学名誉教授）は「明治期の一橋、すなわち高等商業学校が商業の実学教育を目標とする施設であったこと」を重視し、明治20年代ランケ流の近代史学を受容していく過程のなかで、一橋大学の場合『内国商業史取調』という資料調査活動におかれた」点に、東京帝国大学とはまた違う別の特色があったことを示唆している¹²。山田氏は、時冬についての深い分析はしていないが、こうした見方は、近代日本史学史全体を考える上でも極めて重要であったと考えられる。一方、工藤恭吉氏は、「横井時冬と早稲田大学」¹³と題する論文のなかで、主に、時冬の早稲田大学における講義科目などについて検討している。

このように、時冬を論ずるいずれの論者にも共通しているのは、時冬を「実証」「個別的考証」に優れた研究者として捉えていることである。しかしながら、彼の研究は非常に多岐にわたっており、トータルとしての歴史観を把握するためには、より詳細な検討が求められている。とくに、近年の歴史学研究の進展を考えた場合¹⁴、時冬の歴史観や歴史叙述

が、どのような思想形成を経て成熟していったのかについて、時期を追って緻密に検討していくことも必要とされる。それでは早速、時冬の生い立ちを追ってみたい。

1.1. 生い立ち

時冬の経歴については、没後すぐに出版された著書『大日本能書伝』に掲載された年譜が参考になる¹⁵。また、時冬自身も自らの生い立ちを、『芸窓襍載』の序文で語っており、また、著書『日本商業史』の冒頭には、時冬の友人であった歴史家 三上参次が、その経歴を詳しく紹介している¹⁶。これらをまとめると、彼の生涯は次のようなものであったことが分かる（表1参照）。

時冬は、安政六年（1860）12月14日、名古屋城三ノ丸中小路にて、尾張藩士横井時相の子として産声をあげた。幼名は安次郎。この翌年の3月には、大老井伊直弼が暗殺される桜田門外の変が起き、社会が大きく動乱へと向かっていくことになったが、時冬個人にとっては、父

【表1】 横井時冬年譜

年号（西暦）	年齢	事 項
安政6年（1860）	1	名古屋城内三の丸中小路に生る
慶応元年	7	父時相没す
慶応2年	8	師を聘して漢文の素読、習字を始む
慶応3年	9	藩主徳川家に男子生まる、其名を諱みて弥疏次郎と改む
明治元年	10	藩立明倫堂に入学す
明治2年	11	岳櫻隊に編入せらる
明治3年	12	明倫堂庶せらる、庵原存園に就きて漢学を学ぶ
明治4年	13	母没す、赤林信興に就きて歌を学ぶ、此年の末、旧来地中島郡祖父江町に居を移す
明治6年	15	外祖父馬場天遊没す、
明治7年	16	愛知県養成学校一宮分校に入学す
明治8年	17	愛知県養成学校（後に師範学校と改称）に入学す
明治9年	18	同上上等師範科卒業、角田春策に漢学を、小塚直道に国学を学ぶ、
明治12年	21	岡田高嶺、村田梅邸翁の門に入りて和漢学を学ぶ、
明治13年	22	佐藤楚材翁の門に入りて漢学を学ぶ、
明治14年	23	祖母没す、竿鷹略説を修正す、
明治15年	24	愛知県中島郡地誌を著す、
明治16年	25	佐藤楚材翁名古屋を去って隣村山崎村に帰隠す、大沼枕山の門に入る、
明治17年	26	佐藤楚材翁の勸によりて上京し、早稲田専門学校に入学す、小中村清矩翁の門に入る、又翁の紹介にて小杉博士を訪う
明治18年	27	栗田寛翁の門に入る、
明治19年	28	名を時冬と改む、本居豊顕翁の門に入る、専門学校法学部卒業、
明治20年	29	公証人試験に及第す、専門学校兼修英語科卒業、
明治21年	30	大日本不動産法沿革史を著す、高等商業学校教員を命ぜらる
明治22年	31	園芸考を著す 大隈重信に芳野桜苗300本を贈る（大隈邸宅に植える）※1
明治23年	32	高等商業学校教諭に任ぜらる、此年妻森田氏を娶る、
明治24年	33	京阪地出張中陽奎扶斯に罹り郷里に療養す、長男春野生る、日本商業史講義録を印刷す、古事類苑の編纂を委託せらる、小塚直道翁の萬葉長歌類葉抄を訂正出版す、
明治25年	34	3月12日、史学会にて講演「王朝の貿易」（神田一ツ橋）※2
明治26年	35	商人鏡を著す、
明治27年	36	消息文変遷、工芸鏡を著す、 3月24日、史学会にて講演「七寶の説」（神田一ツ橋）※3
明治28年	37	高等商業学校教授に任ぜらる、大日本能書傳稿成る、長女玉葉子生る、
明治29年	38	高等官七等從七位に叙せらる、小堀遠州と本阿弥光悦を著す、
明治30年	39	日本工業史を著す、次男秋野生る、
明治31年	40	高等官六等正七位に叙せらる、日本商業史を著す、
明治32年	41	東京高等工業学校並に商業教員養成所講師となる、日本商業史要を著す
明治33年	42	日本工業史要、日本商業史（維新後之部）を著す、
明治34年	43	高等官五等從六位に叙せらる、大日本美術図譜（小杉博士と合著）日本絵画史を著す、早稲田実業学校講師となる、
明治35年	44	文学博士となる、次女千浪子生る、
明治36年	45	第五回内閣勲業博覧会審査官を命ぜらる、国史纂要を著す、三井家歴史編纂に従事す、専修学校講師となる、
明治37年	46	高等官四等正六位に叙せらる、早稲田大学商科及明治大学の講師となる、芸窓襍載、商業修身教科書（井上博士と合著）を著す、大日本殖産史の稿を起す
明治38年	47	国史撮を著す、勲六等瑞宝賞を賜はる、三男冬海生る、
明治39年	48	高等官三等に叙せらる、特旨を以て從五位に進められる、 4月19日卒す、 4月22日、葬儀 早稲田・慶応・一橋三校関係者計数千人が会葬 ※4

注記）横井時冬著『大日本能書傳』中の「年譜」をもとに作成。ただし※部分は、下記の新聞記事で補った。

※1＝読売新聞（朝刊）明治22年12月24日

※2＝朝日新聞（朝刊）明治25年3月11日

※3＝朝日新聞（朝刊）明治27年3月22日

※4＝読売新聞（朝刊）明治39年4月23日

時相が早くに亡くなったことがより大きな出来事であった（このとき、時冬五歳であった）。この後、時冬は母信子に養われていたが、11歳のころには母もまた亡くなってしまった。晩年になって時冬はこの頃のことを次のように回想している。

まことやおのれは、五歳にして父に別れ、その後母に養はれしかど、母も亦多病にて、つひに十一歳の時に身まかられしかば、家を名古屋城下より、小木曾のほとりたる、祖父江の里に移し、そこにて成長せり（「はしがき」『芸窓襍載』より）

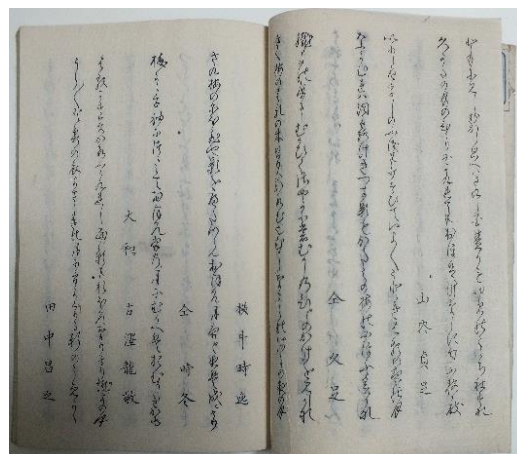
では、時冬が生まれた故郷・祖父江とはどういう地域で、横井家とはどのような家であった。時冬自身は、自分の故郷である祖父江を「かやうなる片田舎のことゝて、碩学鴻儒あるべうもなければ、只横井千秋が家学をつぎたる人々について、いさゝか教をうけしのみにて、これといふ学問を専攻せしことなく、家に傳へたる書をよみて、獨学せしに過ぎさりき」（同上）と称している。

横井家は、徳川家康・義直に従った横井時久を先祖とする名門一族であり、歌人 横井千秋などを輩出した尾張藩士の家である。竿をもって鷹の進退を指揮する「竿鷹」の伝統をもつ家であり、時冬の父時相は御鷹匠頭を勤めたという。よって、ここで「家に傳へたる書をよみて、獨学」というのは多分に謙遜の面もあり、彼が文化資本にきわめて恵まれた家に育ったことは事実であろう。実際、表1を見ても明らかなように、時冬は地元の漢学者らを師とし、高い教養を身に付けていた（なかでも、上京を勧められた佐藤楚材¹⁷による影響が大きかった）。20代の前半には、中島郡中寺学校の教員を勤め、このときすでに「横井弥曾次郎」の名で、『愛知県中島郡地誌』（1882年）¹⁸を著している。ここには、「此書ハ本郡内ノ地理ニ関スル大概ヲ記載スル者ニテ及本郡下小学教科ニ備フルモノナリ」とあり、小学校教員として郷土史教育の便宜のために同書を叙述したとみられる。後に時冬は、学生向けの教授資料を多く執筆するが、その片鱗がすでにこの書にも顕れている。一般的に、郷土史教育が盛んになるのは大正期頃のこと（郷土科教育の始まりも1890年代以降という）であり、時冬の取り組みは、きわめて先見的であった。時冬はこの後、師である佐藤楚材（牧山）の勧めによって上京し、東京専門学校（現、早稲田大学）に入学することになった。

1.2. 東京専門学校時代の横井時冬

— 20代の時冬 —

東京専門学校時代の時冬について知ることのできる史料は少ない。ただ、この時期の時冬が、歌人である兄時逸の影響を受け、和歌に傾倒していたことは間違いないとみられる。明治18年（この年、時冬は東京専門学校に入学している）に尾張の国学者竹田晨正によって編纂された『かたみの梅』という歌集に、横井時逸・時冬兄弟がそろって歌を寄せている（右写真）。



竹田晨正編『かたみの梅』（明治17年）より

『かたみの梅』には、当時の東海地方・西日本の名だたる知識人が歌を寄せている。このなかには、編者の竹田晨正をはじめ、佐藤楚材や遠州報国隊の山本金木（井伊谷宮宮司）、国学者 植松有経などの名前もみられ、歌学を基軸にした東海地方～西日本の文化的な交流圏（これは近世後期より形成していた）のなかに、時冬も位置づけられていたことが確認できる。時冬は、同書の「追加」にも歌を寄せており、この時期、熱心に歌を学んでいたことが分かる。

さて、時冬が早稲田でどのような学生生活を送ったかについて、現時点では不明な点が多い。小杉楹邨の記録によれば、時冬は牛込区築土八幡宮の近辺（現、新宿区筑土八幡町）に下宿し、国文学者の小中村清矩・本居豊穎らを訪ね、制度・文物・歌文・国語等について質問してまわっていたという¹⁹。しかしその一方で、時冬はこの時期、法学科・英学科に在学しており、海外の学問についても熱心に勉強していた。卒業論文は『大日本不動産法沿革史』として出版されることになったが、同書は新聞で次のように紹介されている。

東京専門学校法学部得業生横井時冬氏の著にして英国不動産法沿革史の体裁に倣ひ我国不動産法の沿革を遡源したる著述なり 氏は法学に通ずるのみならず兼ねて和学にも長じたる人なればこの種の著述を為すに最も適当なる人といふべし 通篇周到にして正確取捨また宜しきを得たり 出版元は麹町有楽町の九春堂なり、²⁰

この書評にあるように、同書はイギリスと日本の不動産法の歴史的相違を意識した内容

になっており、冒頭の「例言」で、両国で用いられている語の概念の違いについて詳しく付記している。時冬がここで不動産法の沿革に注目した理由は、同じく「例言」に書かれている「建国以来農ヲ以テ政体ノ基本トシタルハ我国上古ヨリ因襲スル所ノ慣習ニシテ」という言葉に象徴される。また、時冬は『芸窓襍載』の「はしがき」でも「この時（上京）よりして、西洋の学問の一端をも窺ひしれり」と述べている。また、同書の序文には、元老院議官の福羽美静（1831～1907）や小中村清矩（1822～95）らの名前もあり、高等商業学校へ就職する以前から交友ネットワークを有していたことが分かる。

1.3. 横井時冬と高等商業学校 —30代から40代の時冬—

つづいて高等商業学校の教員として時冬の活動について考察していきたい。時冬は、先の『大日本不動産沿革史』を読んだ同校校長の矢野二郎の招来によって²¹、明治21年（1888）に「内国商業史取調係」として同校に就職することになった。当時、同校は、内国勧業博覧会の実施に合わせて、全国各地の商業慣習の調査に乗り出していた（学生たちによる修学旅行調査の実施²²もその一環とみられる）。実際にこの任を担ったのは、土子金四郎（1864～1917）・菅沼貞風（1865～1889）・横井時冬の三人であり、とくに時冬はこの調査に熱心に参加したとみられる。なお、この一方で、同じ時期、東京帝国大学を中心に修史事業が活発に行われていた。その中心となったのは、時冬よりも年長である久米邦

〔表2〕横井時冬らの商業慣習調査の関連が考えられる資料一覧

年代	資料名	内容	執筆者	形態	付記	請求番号
明治22年2月2日	函館商業慣例取調書 一～三	農商務省より下付せられたる諮問案取調	農商務省	縦帳3冊（毛筆）		貴:X:153
明治21年4月下旬	糸乱記 乾坤 糸割符由緒		横井時冬謄写	縦帳3冊（毛筆）	明治25年5月4日	貴:186
年未詳	慣習誌地本屋		板谷良作編	縦帳1冊（毛筆）	明治26年3月6日購入	貴:X:157
明治14年11月	古来慣習誌料	商法会議所講習所に宛てられた答申書の形式ほか	清水九兵衛誌	縦帳2冊（毛筆）	商法講習所原稿用紙。 高等商業学校印	貴:X:160
明治22年4月26日	内国商業慣習	桐生商景並に手形流通の変遷（内国商業実践科）	分業調査部	縦帳1冊（毛筆）		貴:X:168
年未詳 （明治20年代力）	農事調査			縦帳17冊	高等商業学校原稿用紙 大正8年7月28日寄贈	貴:X:170
年未詳 （明治20年代力）	商業誌 一～十七	全国の情勢についての詳細な調査報告書		縦帳17冊（毛筆）	高等商業学校原稿用紙 横井時冬分担執筆	貴:X:175
年未詳 （明治20年代力）	物産志料 一～二			縦帳2冊（毛筆）	商法講習所原稿用紙。 高等商業学校印	Rc:70:18
年未詳	関市令 第二十七			縦帳1冊（毛筆）		貴:253
年未詳 （明治20年代力）	水産調査書 一～三			縦帳3冊（毛筆）	高等商業学校原稿用紙 横井時冬分担執筆力 挿図あり	貴:X:177

注記

- ・ 上記の資料はすべて、一橋大学附属図書館貴重資料室に所蔵されている。
- ・ 請求番号は、一橋大学附属図書館が付記したもの。

武・重野安繹らであった²³。東大の国史編纂事業と並行するかたちで、高等商業学校の教員らによる商業調査活動が実施されていた。

一橋大学附属図書館には、この頃に編纂されたとみられる史料が数点存在する（これらを一覧にしたものが表2）。こうした資料は、執筆者や年代等が記されてなく、少なくとも三名の異なる筆跡が確認できる。猪谷氏も指摘しているように²⁴、横井時冬、菅沼貞風、それから土子金四郎によって執筆されたものと考えるのが妥当であろう。『内国商業慣習』は、「商業慣習」の定義から始まり、各地の「商業慣習」を緻密な資料収集によって記録したものである。また、全17巻にわたり全国を網羅する『商業誌』は、同時期（挙げられている資料から明治20年代とみられる）の商業状況、特徴、流通網を知る上でも貴重である。また、附属図書館には、時冬が大阪出張の際に筆写した「糸割符由緒」などの記録も残る。全国への調査研究のなかで、時冬はこうした各地に残る貴重な資料を閲覧し、謄写本を作成していたとみられる。

また、時冬はこうした調査研究とも関連して²⁵、第3回および第5回内国勸業博覧会などにおいても重要な役割を果たしている。まず、園芸部門の専門家として批評の依頼を受け²⁶、新聞紙面に「私評」を掲載している²⁷。時冬が専門家として招来された理由は、これに先立って『園芸考』を執筆していたことが大きい。出品物に対する時冬の「私評」からは、彼の園芸そのものに対する造詣の深さが読み取れる。第5回内国勸業博覧会でも、時冬は内閣によって審査官に任命され、その功勞により銀杯一個を下賜されている。

こうした活動の一方、時冬は高等商業学校の附属図書館への貢献も大きかった。明治36年（1903）に初めて設けられた図書館委員を任され（ほかに福田徳三・瀧本美夫）、未整備であった図書館運営の組織体制の構築に関与した²⁸。図書館委員会では、閲覧方法や、書架等の整備、教員の教授・研究用必要となる著書の購入手続きなど、細部にわたって議論されたとみられる²⁹。実際、図書館委員会や時冬との関係は記録に残らないが、とくに明治37年以降（松崎蔵之助校長時代）、附属図書館では都道府県の統計書の収集や、長崎の古文書（謄写）の受入、大阪商船株式会社や農工商務省との図書の貸借・寄贈などを開始している。また、表3、時冬が附属図書館に「納付」した書物を一覧にしたものである。これによれば、図書館委員になる以前から自身の著作物のほかに謄写資料や和書などを図書館に入れていたことが分かる³⁰。

〔表3〕 横井時冬の附属図書館への資料納付記録

年月日	書名	著者	出版年	事項（※図書原簿の記載）
明治25年4月15日	札差考 写本	横井時冬著		謄写
明治25年4月15日	長崎入港貿易船年表 写本	横井時冬著		謄写
明治25年4月15日	屋号考 写本	横井時冬著		謄写
明治25年4月20日	新板庭訓鈔 上下巻		宝永3年9月出版	助教授横井時冬納付
明治25年5月4日	糸乱記 写本			前年謄写
明治25年5月4日	糸割符由緒 写本			前年謄写
明治25年7月11日	大日本不動産法沿革史	横井時冬編		助教授横井時冬納付
明治26年2月25日	萬葉長歌類葉抄 洋装	小塚直持輯 横井時冬校	明治26年11月出版	助教授横井時冬納付
明治26年12月12日	千島探検実紀	多羅尾忠郎著	明治26年7月出版	助教授横井時冬納付
明治26年12月12日	商人鏡 巻ノ一・二	横井時冬編	明治26年11月出版	助教授横井時冬納付
明治27年3月24日	消息文変遷	横井時冬編	明治27年3月出版	助教授横井時冬納付
明治27年12月25日	工芸鏡	横井時冬編	明治27年12月出版	横井時冬納付
明治28年7月16日	先考行状 青山延光傳	青山勇編集	明治28年1月出版	横井時冬納付
明治29年2月4日	歴代草書選	自芝山著		教授横井時冬納付
明治31年3月24日	日本工業史 対照図付	横井時冬編	明治31年10月出版	横井時冬納付
明治33年12月13日	日本商業史 巻ノ二	横井時冬編	明治33年11月刊	教授横井時冬納付
明治39年11月24日	大日本能書傳	横井時冬編	明治39年8月30日刊	横井春野寄付

注記）一橋大学附属図書館所蔵図書原簿より作成

以上、時冬の活動を追ってきた。とくに高等商業学校教授時代の時冬は、同校およびその背後にある明治国家の要請を受けて、内国商業の調査に邁進していた。こうした多忙な公務のなかで、時冬は粛々と自身の歴史研究の研鑽を積み上げていったとみられる。次に、時冬の著作の分析を通して、彼の歴史観や方法論の変遷を、時期ごとに把握していくことにしたい。

2. 横井時冬の歴史観

さて、歴史家としての時冬を考える場合メルクマールとすべきは、やはり先述したような彼の立場（職務としてのポジション）であろう³¹。時冬は、高等商業学校に雇われた研究員として、または教員として、「国史」研究を行っていた。彼の著述活動は非常に多岐にわたっている。時冬が生涯に執筆した著作は、表4ように膨大なものとなる。しかし、その著述活動もまた、彼の置かれた立場のなかで成熟していったものである。以下、具体的にみていきたい。

2.1. 第Ⅰ期 研究調査員としての時冬

〔表4〕横井時冬著作目録			
出版年	西暦	著書名	出版社
明治21年4月	1888	大日本不動産法沿革史	九春堂
明治22年3月		－「屋号考」(『愛知学芸雑誌』1号)	愛知学芸雑誌社
明治22年12月	1889	園芸考	大八洲学会
明治23年1月	1890	－「寒雀」「古寺松」「流通手形といふこと」(『愛知学芸雑誌』18号)	愛知学芸雑誌社
明治25年		－「盆栽考」(『日本園芸会雑誌』36号)	日本園芸会
明治25年7月	1892	日本商業史講義録 其一(増補訂正印刷)	非売品
明治26年1月		万葉長歌類集抄(小塚直持編・横井時冬校訂)	稽照館
明治26年1月		－「煙草砂糖の伝来並に繁殖」(『愛知学芸雑誌』19号)	愛知学芸雑誌社
明治26年6月		－「瀬戸陶磁器の沿革」(『愛知学芸雑誌』24号)	愛知学芸雑誌社
明治26年6月		－「盆栽考」(『愛知学芸雑誌』34号)	愛知学芸雑誌社
明治26年8月	1893	－「七宝の由来」(『横浜貿易商青年会誌』第1巻1・2号)	横浜貿易商青年会
明治26年9月		－「日本園芸史」(『愛知学芸雑誌』25・28号)	愛知学芸雑誌社
明治26年10月		－「島津氏と琉球との関係」「七寶の由来」(『愛知学芸雑誌』26号)	愛知学芸雑誌社
明治26年11月		商人鏡	金港堂
明治26年11月		－「江戸幕府時代支那貿易に供せし水産物」(『愛知学芸雑誌』27号)	愛知学芸雑誌社
明治27年1月		－「戸山苑考」(『愛知学芸雑誌』29・33号)	愛知学芸雑誌社
明治27年2月		－「小堀遠州」(『愛知学芸雑誌』30・32号)	愛知学芸雑誌社
明治27年3月		消息文変遷 一名・かりのゆくへ	金港堂
明治27年3月		－商人鏡(『愛知学芸雑誌』31号)	愛知学芸雑誌社
明治27年9月	1894	－「嵯峨の豪商角倉與一の事蹟」(『愛知学芸雑誌』35号)	愛知学芸雑誌社
明治27年10月		－「江戸幕府時代の海運」(『愛知学芸雑誌』36号)	愛知学芸雑誌社
明治27年12月		工芸鏡	六合社
明治27年12月		－「仮面彫刻の概況」(『愛知学芸雑誌』37号)	愛知学芸雑誌社
明治27年12月		－「根付彫の概況」(『愛知学芸雑誌』38号)	愛知学芸雑誌社
明治28年1月		－「本阿弥光悦」(『愛知学芸雑誌』39号)	愛知学芸雑誌社
明治28年3月	1895	－「靈鷹高千穂の説」(『愛知学芸雑誌』40号)	愛知学芸雑誌社
明治28年3月		－「和漢 漢和」(『愛知学芸雑誌』41号)	愛知学芸雑誌社
明治28年5月		－「商業の株式」(『愛知学芸雑誌』43・44号)	愛知学芸雑誌社
明治29年2月		－「鐘考」(『愛知学芸雑誌』50・51・52・53・54・55号)	愛知学芸雑誌社
明治29年11月	1896	小堀遠州・本阿弥光悦	裳華書房
明治29年11月		－「加賀国金沢の公演」(『愛知学芸雑誌』57号、横井年魚市人著)	愛知学芸雑誌社
明治30年5月		－「道明正使僧策彦の傳」(『愛知学芸雑誌』63号)	愛知学芸雑誌社
明治30年7月	1897	－「嵯峨の豪商角倉與一」(『実業之日本』1巻1・2号)	実業之日本社
明治30年10月		－「白磁礪の発見家-金江三平傳」(『実業之日本』1巻5号、年魚市人著)	実業之日本社
明治30年12月		－「陶業三傑傳」(『実業之日本』第1巻7号)	実業之日本社
明治31年2月		日本工業史	—
明治31年5月	1898	－「愛知県絹木綿の進歩」(『愛知学芸雑誌』73号)	愛知学芸雑誌社
明治31年9月		－「桃山時代における工芸の一斑」(『愛知学芸雑誌』75号)	愛知学芸雑誌社
明治31年12月		日本商業史 巻一、二	金港堂
明治32年3月	1899	－「点茶の流行が工芸品に及ぼしたる影響」(『愛知学芸雑誌』80号)	愛知学芸雑誌社
明治32年4月		日本商業史要	金港堂
明治33年		日本殖産史	早稲田大学出版会
明治33年1月	1900	日本商業史 続編	金港堂
明治33年2月		日本工業史要	吉川半七
明治33年7月		－「宣与荅董の考」(『愛知学芸雑誌』90号)	愛知学芸雑誌社
明治33年10月		御国の光解題	吉川半七
明治34年10月	1901	大日本美術図譜(小杉經郷共著)	吉川半七
明治34年12月		日本絵画史	金港堂
明治36年6月		国語漢文科読本字解 －「大坂商業の沿革」	湖東学院
明治36年6月	1903	国史論纂 －「長崎に於ける清蘭の貿易」 －「江戸幕府時代支那貿易に供せし水産物」 －「江戸幕府時代の海運」	大日本図書
明治36年9月	1904	国史攷要	金港堂
明治37年3月		芸窓機載 全	明治書院
明治38年1月	1905	国史攷 中等教科	明治書院
明治38年5月		中等教科国史攷	明治書院
明治39年10月	1906	大日本能書伝	吉川弘文館
明治40年7月	1907	－「御邸へ伺候致させ可申-(木版筆蹟入)」(『手紙雑誌』4巻6号)	手紙雑誌社
明治41年	1908	－「富山の売薬」(下山順一郎ほか『博士の売薬研究』)	春泥書房

買に置かれているが、近世の土地売買禁制まで詳細に検討されている³²⁾。

時冬は同書出版後すぐに高等商業学校に就職したが、これと時を同じくして園芸史研究に関心を向け始める。『大日本不動産法沿革史』の出版の翌年には、早くも『園芸考』

時冬の卒業論文をもとにした著書『大日本不動産法沿革史』(1888年)は、先述したようにイギリスの不動産法と日本のそれとを比較した上で、土地に関する個別の法律について論じている。叙述方法としては、まず古代から江戸時代に至るまでの政治上の制度を概観した上で、第三編以降で各法律に関して具体的に論じている。この理由は「我国不動産法を叙セントスルニハ予メ制度ノ変遷ヲ陳ヘサルヘカラサルノ必要アレハナリ」(p.2)であった。記述の重点は、古代・中世における土地売

(1889年)刊行している。同書は、「本邦古へより、作庭美術に関する完全の著書ある事なし」という問題意識に立って編纂されたものであり、『大日本不動産法沿革史』とは種別を異にしているが、次の点に共通性がある。

まず、「桓原朝以来奈良朝の末」「桓武帝平安定鼎以来鎌倉幕府の末」「足利氏幕府時代」「織田豊臣氏幕府以来徳川氏幕府時代」「維新以来」という時代区分のなかで作庭について叙述されていることが挙げられる。時冬は、都の建設と園芸技術との密接なかかわりに注目していたが、平安朝期と鎌倉期を同編中で論じていることなどにも注目する必要がある。室町期以前の武家邸宅についての記述は、黒川真頼の『工芸志料』(1878年)に依拠しているところも多く³³、このことがこうした叙述につながったのであろう。つづいて、「維新以来」の項目の冒頭で、時冬は次のように述べている。

今より回顧すれハ、明治維新の改革ハ敗壞的より成りたるか故に、千金の古器も塵埃に委し、万工を費したる名苑も斧斤を蒙るに至れり、之に加ふるに西洋の文物を一時に輸入したるより、日に舊を去て新に移るを競ひて快事となし、家屋の建築より家具什器に至るまで、西洋風ならされハ世に誇る事能ハさる状に陥れり、若しこの敗壞主義をして、数年間継続せしめなハ、我固有の美術ハ、蹟を大八洲中に絶たんかもしるへからさるなり、ことに予か論する庭園の如きハ、大名若くハ寺院に附属したるもの多きか故に、最もこの禍を蒙ること甚しかりしなり、(p.144~145)

この文章には、時冬が実際に体験してきた明治維新という時代に対する思いがあらわれているとともに(より具体的には、西洋風の庭園の導入にともなう日本古来の庭園文化の消滅)、当時の日本の社会状況についての現実的な問題関心があったことが読み取れる。とくに、時冬の優れていたところは、西洋庭園が幾何学的・技術中心主義であり、日本のように自然を尊重しないものである点を指摘しつつ、その一方で「西洋の養樹法栽培ハ本邦の及ハさる所なるか故に園芸美術を拡張せんとおもハ宜しく西洋の法を参考して用いるべき」(p.152)としているところにあるだろう。これは、時冬が、西洋の科学技術と、日本の自然主義という庭園の特徴をよく理解していたことを物語っている³⁴。

なお、本書の末尾には、『園芸考』執筆にあたって、福羽美静・伊藤圭介・小中村清矩・黒川真頼・宇田淵・山高信離・岡倉覚三・栗田寛・本居豊穎・小杉楹邨・久米幹文・鈴木重嶺・千宗左・堀内松翁・古筆了仲・土子金四郎・田原榮・柏木貨一郎・川崎千虎・魚住

長胤・小宮綏介・小澤圭次郎・平塚蕉窓・水莖磐樟・河邑樞屋の「補助」を受けたとする。いずれも当時を代表する文化人たち（国学者が多い）であり、こうした人々の交流が時冬の文化史研究をより豊かなものにしていったことは想像に難くない。

先述したように、この『園芸考』の評判によって、時冬は博覧会の批評員などに抜擢されるが、個別研究も引き続き進め、「盆栽考」（1892年）を執筆するなど、文化史研究もより深めていく。その一つの到達点が、『日本商業史講義録』（1892年）であった。以下みてみたい。

2.2. 第Ⅱ期 教員としての時冬 — 商業史概説および日本文化史研究へ —

時冬は、やがて高等商業学校の助教授・教授として「商工歴史」（日本商業史）を講じるようになった。時冬が、高等商業学校においてどのような講義を行っていたのかについては、『日本商業史講義録』と、上田貞二郎が残した講義ノートが参考になる³⁵。まず、上田のノートによれば、時冬は、高等商業学校の同僚であった菅沼貞風著の『大日本商業志』について「貿易ヲ主トシテ記述シタル者寛永十三年ヲ以テ終ル 其内「平戸貿易志」ト称スル分最価値アリ」と述べていたようである。このほかにも、遠藤芳樹の『日本商業誌』（1891年）が「農商務省ノ調査ヲ基礎トス編年体ナリ 寧ロ古代ノ部ニ参考トス可キ事多シ」と、参考書として紹介されている。

上田貞次郎の講義ノートの記述から、時冬は「商業歴史」において、朝鮮との交易に力点を置いて講義を展開していたことが知られる（この点、『帝国商業史講義録 其一』とも一致する）。同書は、「第7章 朝鮮の交通」「第8章 支那の交通」「第15章 朝鮮及支那の交通貿易」などの章立（全16章）が立てられていることから、分かるように、「内地商業」・「内地交通」に加え、朝鮮半島や中国との貿易関係が重視された構成になっている。

なお、この時期の時冬は、日本文化史研究をさらに積極的に推し進めている³⁶。とくに『工芸鏡』（1894年）などがその典型であるが、明治31年3月、時冬は農商務省から工業誌編纂を囑託され、その調査を乗り出し、翌年には工業高等学校から図案科の授業を依頼されている³⁷。時冬の歴史叙述は、人物史研究へと昇華され、『小堀遠州・本阿弥光悦』（1896年）などが執筆されていくことになる。なかでも、『商人鏡』（1894年）は、大阪・京都・横浜・神戸・函館・長崎・新潟・名古屋・滋賀各地商業学校長の依頼によって模範となる商人たちの伝記を編纂したものであり、「倫理科」の教材として作成された。ちなみに、ここで選択されている人物も、対外貿易で活躍した商人たちが中心であった。

時冬の国際的な視点は、この時期に刊行した商業史・工業史のテキストである『日本工業史』（1898年）、『日本商業史』（1898年・1900年）にも明確にあらわれている。同書の分析は、明治期の商工業の具体的な検討にまで及んでおり、明治日本が国際的に台頭していくなかで、時冬が学生たちに何を伝えようとしていたのかが知られる。時冬は、『商人鏡』『工芸鏡』などからも知られるように、江戸時代に活躍（とくに貿易・殖産などで）した商人や職人を一つの模範・モデルとして示すことに尽力しており、商人・職人の育成に本旨を置いていた。ここに、商業学校の日本史教員という使命を担った時冬の教育観がみてとれる。研究者としての時冬にとって、もっとも重要な問題提起は、室町時代の「座」をめぐる一連の見解である（『日本商業史』『日本工業史』等）。これは、同じく高商の教員であった福田徳三によって厳しく批判されることになるが³⁸、その先駆けとしての役割を時冬の著作が果たしたことは間違いない。このほかにも、福田が日本経済史を論じる上で、時冬の論稿を度々引用し批判していることから、日本史研究における福田の主要な論敵が、自身の先生でもあり同僚でもある、時冬であったことがうかがえる。

この時期、東京帝国大学では、いわゆる筆禍事件（1892年）により、久米邦武・重野安繹らが失職していくことになった。いうまでもなく、時冬はそれとはかかわらず、独自の歴史研究の道を歩んでいたことが分かる。時冬の構想する歴史研究は、「商業史」「工業史」を看板としているが、その実は、対外交易史に視点を置いたものであり、さらにいえば日本文化論に主軸が置かれていた。これは、当時の国史研究の中心的課題であった政治史研究の方向性とは一線を画するものであった。そして時冬がこうした歴史研究を実践した背景には、日清・日露戦争という対外戦争に乗り出す明治日本の情勢があったであろう。つづいて、1900年代以降の時冬の著作を検討していきたい。

2.3. 第Ⅲ期 晩年の歴史認識へ — 「殖産史」という視点 —

時冬は晩年、早稲田大学商学部の創設に尽力している³⁹。この時点の歴史研究としては、日清戦争後、日露戦争へと進む当時の日本の状況を受けて、以前より進めてきた対外関係（貿易）史研究を更に深めていく。その代表的な研究が、『日本殖産史』（1900年）である（同書は、明治37・38年の早稲田大学歴史地理学科第一学年を対象とした講義録をもとにしている）。

同書の構成は、「第1編 建国より韓土内附まで」「第2編 仏教伝来より寧楽朝の末まで」、「第3編 平安奠都より平氏の滅亡まで」、「第4編 鎌倉幕府の創立より桃山時代の末

まで」、「第5編 江戸幕府の創立より大政奉還まで」とされ、農業・商業・産業（美術・工芸を含む）の発達に通史的に叙述されている。本書のなかでも「第4章 外国伝来の工芸」（第1編）、「第12章 欧洲人の渡来により発達せし工芸」（第4編）、「第十四章 有用植物の伝来」（第4編）、「第22章 長崎貿易と殖産」（第5編）など、外国との貿易関係に重点が置かれた叙述がなされている。この点は、「第21章 鎖港の殖産に及ぼしたる影響」のなかにも明確にあらわれている。

・・・こゝにおいて乱（天草の乱―引用者注）平ぐる後、蘭人、支那人の外、日本に通商することを禁じ、大に貿易を縮小せり、この結果殖産の上に影響を與へしもの少からず、南洋貿易の盛なるや、年々種々の工芸品を輸入せしのみならず、有用植物を輸入して、大に殖産上に利益を與へき然るに一朝外国の渡航を禁ぜられしより、これら輸入の道を杜絶し、延いて其影響を我殖産の上に及ぼせり。（p.71）

ここには、江戸幕府による「鎖港」政策への批判が述べられている。時冬がこう語る背景には、言うまでもなく日清戦争後、産業化を進める日本の現実の姿があったであろう。時冬の歴史研究が、当時の国家的要請に応えるべく迎合的性格のものであったことは疑いようのない事実である。時冬は、他の歴史家たちと同じくこの時期、積極的に「国史」研究に乗り出している。なかでも中学生向けに叙述された『国史攬要』（1903年）と『国史撮』（1905年）はこの時期の時冬の歴史観を知る上できわめて重要である。前者は、古代から現代までの歴史を通覧したものであり、その時代の風俗・文学、商工業、外交などが重点的に平易な文章で指摘されている。なかでも「第12編 明治の新政より北清の役まで」では、条約改正、日清戦争など、当時のタイムリーな話題まで丁寧に叙述されている。本書の末尾は次のように記されている。

昨三十五年日英両国同盟なりぬ、こは両国心を同うし力を合せて、極東の平和及清韓の領土保全と独立とを維持し、且互に東洋における商工業の利益を保護せんとの同盟よりなれる協約なりき、こゝにおいて我邦の責任一層重くなりて、其動作如何は、つねに世界各国の窺ふ所となれり、されば我邦人相戒めて、国家の実力を養成し、国運の進歩と共に国威の発揚を努むべきなり。（p.166）

これらの文章からは、熱心に商工業史研究に取り組んだ時冬の問題関心が浮かび上がってくる。時冬の歴史観の背景には、条約改正に臨み、日清・日露戦争へと向かう明治日本の同時代的な問題関心が克明に存在していた。それは『国史撮』の冒頭「例言」で「本書の体裁は、中学校教授細目に拠り、傍ら自己の意見を加へて編纂せり、そは外交・商工業の如き、将来の国民たるべきもの、必要と認めたるものに限り」という言葉からも知られるところである。さらにこの時期、時冬は日本文化史のなかでも「絵画」に焦点をあてた研究を進めている。『日本絵画史』（1901年）、『大日本美術図譜』（1901年）などである。同書は、従来の絵画についての書物が「伝記」体であることを批判し、「歴史体に絵画の発達を説明」しようと試みたものであるが、同書は維新後の西洋画の普及についても触れている。時冬は、絵画史や商業史を通じて、当時の日本が国際社会のなかで置かれた状況と、近代化・西欧化の意味についての歴史的な位置づけを試みようとしたのであろう。

以上みてきたように、時冬の「国史」研究は、商業史・経営史研究という枠組におさまりきらない、国際的視野に立った「国史」研究であった。時冬はこの時期も日本文化にまつわる著書を多く刊行していくことになるが、それもこうした歴史観と矛盾しない。むしろ、日本文化の外発的要因を貿易や商工業の発展に求めるところに時冬の歴史家としてのオリジナリティがあった。「高等官」として歴史研究・調査を実行した時冬は、日露戦争期には「殖産史」を講じていくことになる。そこには、官として生きた時冬の国家に対する責任感・使命感のようなものがあつた。ただし、商業慣習調査として全国の現況を調査するなかで、歴史資料の収集を行っていた時冬は、貿易史研究・文化史研究という視野の広い研究を展開することができた。そして、ここには、江戸期の鎖国状況と維新後の西欧文化の流入に対する危機感と期待感が共存していたことも見逃せない。

早稲田大学図書館には、当時の名だたる学者たちが時冬に宛てて送った書簡を卷子状にまとめた資料が所蔵されている⁴⁰。ここには、小中村清矩、福羽美静、佐藤楚材、佐々木信綱、小杉楹邨、中井敬所、大口鯛二、前田香雪、杉山令吉、三浦竹泉、小中村清矩ら時冬と深い交流のあつた人物からの書簡が収録されている。時冬は、小中村や杉山らのほかに、尾張出身の知識人たちとのつながりも生涯を通じて有しており、『愛知学芸雑誌』などの投稿も続けていた。若い頃から有していたこうした交流の広さも文化史研究をもとにしたグローバルな「国史」研究を推し進めていく一つの契機となったといえるであろう。すなわち、時冬の研究は、江戸時代以来の知識人・文化人たちの国文学ネットワークと、政府・高商の要請に従った教育・研究の上に構築されたものであり、歴史観としては、①日

本文化に対する深い理解と、西欧近代合理主義の概念が共存しており、同時に、②現地調査にもとづく実証主義的な研究姿勢を堅持しており、さらに③日本文化（絵画や庭園など）を対外関係（貿易史）のなかで国際的視野から眺めようとする視座の三つに支えられたものであった、と結論づけられるであろう。

2.4. 横井時冬の影響

最後に、時冬没後、彼の研究がどのような影響を与えていったのかについて考察しておくことにしよう。時冬の没後間もなく、日本地理学会が刊行している学術雑誌『歴史地理』に、時冬の追悼記事が掲載された。ここに「故文学博士横井時冬君小傳」という文章を寄稿した小杉楹邨は、次のように述べている。

この廿三年の数年月の中には、公私の旅、東西南北かけてものせられし、みな得意の思想を培養せし所なれば、余の益友のみならず、かゝる多種に涉りて、嗜好の只ならぬ人は、実に得がたかるを、特に本務の商業古今の沿革、工業の研究などに至りては、専売特許のかけ札をかけられよなど、つねに戯れかららひつる人々も多しときく。（中略）まことや時冬君は、温厚にして謹み深く方正の性質朋友に信あり、朴素を主張せられければ、つねに詠吟する詩歌、また記事文なども、独りこれを決せず、其すぢの人に必益を請ふ、故に余はいつも其歌記事文、或は考証文など見ざる事なしといふも、恐らく虚飾にあらじと思ふほどなるが故に、数種に渉れる得意を能く知れり。（p.3-4）

また、三上参次も、時冬を「性また堅忍特に考証に得意なり」として、とくに明治21年より時冬が携わった内国商業史取調係での調査活動に触れ、次のように述べている。

それより後は横井君独り奮発して事に当り、商業学校もまた保護を與へられしかば我帝国大学の書庫及び史誌編纂係、帝国博物館、東京図書館、内閣の書庫、水戸の彰考館などに蔵せる貴重の図書を閲覧し、或は東京府庁に請ひて旧幕府よりの引継き書を攻案し、或は旧諸藩主の邸に就きて其記録を検覈し、或は実際の経験ある古老に質し、或は米相場の事を調査せんが為めに久しく大阪市に出張するなど、専ら材料の該博にして且つ精確ならんを務められたり⁴¹

時冬の「温厚」な人となりを強調する小杉と、丹念な調査活動に着目する三上との間には微妙な視点の相違はあるが、時冬が本務として実証的で手堅い研究を行っていたことに對する評価は共通している。

なお、時冬は教科書類などの教授資料の編纂に尽力しており、彼の文章は戦前の社会教育・国語教育のなかでも活用されている。たとえば、国民教育研究会編纂の『高等補習大正国民読本』（1919年）には、時冬の「維新後織物の進歩」と題する小稿が載せられているし、『新訂国文教授資料 卷五 商業学校用』（1930年初版）には、時冬の著した「欧人と日本人」と題する文章が載せられている（このなかで、時冬が「尤も日本文化の史的研究に勝れてゐた」と紹介されていることも興味深い）。

また、繰り返しになるが、時冬が高等商業学校附属図書館のコレクションの形成に与えた影響も大きい。すでに論証したように、時冬は自身の書いた本やそれ以外の書物を図書館に「納付」していたが、これとは別に附属図書館が現在所有するコレクションは、時冬の研究と密接に絡んでいる。たとえば、一橋大学附属図書館の「札差関係資料」は、大正・昭和初期を中心に収集されたものであるが（最も早い「札差仲間条目帳」は、明治35年（1902）6月に購入されている）、時冬は「札差考」⁴²という論考を執筆している。また、附属図書館には、江戸・明治期の長崎関係の古文書コレクションを蔵するが、こうした研究も時冬が進めていたものであった。これらのコレクションが、時冬の研究を意識して収集されたことを示す具体的な史料は残らないが、附属図書館の貴重書は、結果論として、時冬の研究方針と密接に絡むものとなっている（このほか、附属図書館がネットで公開している「江戸期商業関係資料」にはこうした性格のものが多し）。時冬を直接・間接的に受けた人びとの何らかの動きがあったのかも知れない⁴³。今後この部分の解明をめざしたい。

このように多岐にわたった研究を行った時冬であったが、やはりその基盤にあったのは青年時代に薫陶を受けた歌学・国文学の高レベルの教養であった。文学者の佐佐木信綱は、著書『明治文学の片影』⁴⁴のなかで、時冬との和歌を通したつながりについて述べ、次のようにいっている。

（時冬は——引用者注）日本商業史、日本美術史等の著者で、本居翁の古事記伝の出版を助けた名古屋藩の家老横井千秋の一門の裔であつたので、鈴屋翁や千秋の逸事をよく知つてをられ、時々聞いたことであつた。篤実な学者として、極めて篤実な話ぶりで

あつた。(p.65)

「篤実な学者」である時冬は、明治20年代から30年代を中心に活躍した歴史家として、国際社会のなかでの日本を歴史社会のなかで明らかにしようとする明確なヴィジョンと、自らが幼くして培ってきた教養に裏付けされた日本文化への深い造詣とナショナリズムを共存させていた。それは換言すれば、殖産興業をめざす国家の官人としての立場と、日本古来の文化的伝統を重視する立場を、自身のなかに常に同居させており、それを背景に歴史叙述をおこなっていたということを意味するだろう。彼の歴史研究は「経済現象の個別的な考証」ととどまるものではなく、時代の要請に順応し、対外関係史（国際社会のなかでの日本）という一つの確固とした歴史体系のなかで展開された、きわめて野心的で、啓蒙的なものであったといえることができる。そしてその背景には、商業学校の教員として、理想の商人像、職人像を提供しようとする彼の教育に対する熱意があつた（それが端的にあらわれているのが、井上哲次郎との共著『商業修身教科書』（金港堂、1904年）である）。

歴史研究に演繹法的手法と帰納法的手法があるとすれば、時冬のスタンスは後者ではなく、むしろ前者に置かれていたといえるだろう。彼の歴史研究を単に経営史研究・商業史研究として捉えるのではなく、「国史」研究の一つ — ただし、これは東大を中心に展開された政治史研究、また京大を中心に展開された文化史・社会史研究とは別系統、「横井史学」ともいえる — として、個別に理解しなければならない理由がここに置かれる。単に公務としてのみ活動した研究者とは違う、研究者としての「個性」が、そこに看取されるからである。

おわりに

今日の歴史研究からみれば、時冬のもつ歴史像は、殖産興業をめざす明治国家の政治的な要請を受けた植民地主義的な側面と、国学の教養に支えられた愛国主義的色彩を持ち合わせた、極めてナショナリズム的色彩の強い歴史学と判断されてしまうかもしれない。しかし、全国各地の現況を調査し、地域にのこる資料を蒐集した上でそれらを緻密に分析し、歴史叙述を展開させていったその研究スタンスや、近代以前の商業史・工業史の流れを踏まえ、そのなかで活躍した模範的な商人・職人（工芸美術）を示していった、彼の教育方針には、学ぶべきところも多くあるだろう。

時冬は、日露戦争の直後、明治39年（1907）4月、四七歳の若さで亡くなった。死の1か月前の同年3月に早稲田大学図書館に寄贈された先述の卷子には、「右為小中村文学博士以下十一人束牘皆吾師也、今軸以納于早稲田大学文庫」と書かれている。病魔が差し迫ってくるなかでも、何かを後世に遺そうとする、時冬の強い意志のようなものを感じられる。

時冬が生み出した業績は多い。それにもかかわらず、彼の名が現在まで十分に届いてこないのには、やはりいくつか理由が考えられるだろう。東大の国史学科が歴史学の本流としての役割を担うことになったこと、そして皇国史観が台頭したこと、さらには戦後のマルクス主義的歴史観と時冬の官学的な研究姿勢が相容れないものであったことなど、様々な理由が考えられる。しかし何よりも大きかったのは、時冬が若くして没し、大正から昭和戦前戦中期という思想の成熟過程を経験できなかったことによるであろう。

時冬の早すぎる死は、多くの人たちに悼まれた。その葬儀には、早稲田大学・慶応義塾大学・明治大学の3校の関係者ら合わせて数千名が会葬したという⁴⁵。彼には当時一五歳になる息子春野をはじめ5人の子がいた。同僚であった東京高等商業学校の教員らを中心に、時冬の遺児のために寄付が募られたという⁴⁶。

近年、戦前の日本史学者に対する研究がますます盛んになっている。東大アカデミズムの総本山であった黒板勝美⁴⁷や皇国史観の主唱者として知られる平泉澄⁴⁸らを中心に、幅広く検討されている。そうしたなか、時冬のように大きな歴史像を胸に抱き、緻密に資料を蒐集し、それに基づきながら一つ一つの史実を実証していく歴史叙述のスタイルがあったことも考えていかなければならない。それはリースらによって日本に導入された実証主義的歴史学の、東大とは別のもう一つのコースであり、のちに幸田成友・川上多助らによって引き継がれる、一橋大学の日本史研究の大きな道しるべとなったといえるだろう。時冬もまた、一橋大学の重厚な学問史における、一つの重要な源流なのである。

¹ 上田貞次郎.緒言.商業史教科書 日本之部.三省堂.1939,p.3. 上田貞次郎については、本書掲載の大場高志.『上田貞次郎宛書簡コレクション』について.を参照のこと。なお、本稿に置いて文献を引用する際は、すべて旧字体を新字体に直して記した。

² 金澤幾子編.福田徳三書誌.日本経済評論社,2011. 西沢保.厚生経済学の源流.経済研究.65-2,2014 同.福田徳三の厚生経済研究とその国際的環境.経済研究.57-3,2006. 特集 福田徳三とその時代.一橋論叢.132-4,2004.に所収されている各論稿。武藤秀太郎.近代日本の社会科学と東アジア.藤原書店,2009. など。なお、上田の日本商業史研究が福田と横井に学んだところが多い点については、金子鷹之助氏も指摘している（上田貞二郎先生.一橋論叢.5-6,1940。

³ 永原慶二.二〇世紀日本の歴史学.吉川弘文館,2003.

- ⁴ 20世紀日本の歴史家たち(1)～(5).刀水書房,1997-2006.ただし、これらは20世紀の歴史家を中心に論じるというスタンスであり、その編集方針から横井時冬(1906年没)の項目を落とした可能性も考えられる。ただし、同年代に活躍した重野安繹(1910年没)らは掲載されている。
- ⁵ 岩井忠熊.日本近代史学の形成.北山茂夫.日本近代史学の発展.岩波講座 日本歴史 22(別巻1).岩波書店,1963.
- ⁶ 小沢栄一.近代日本史学史の研究 明治編.吉川弘文館,1968.
- ⁷ 時冬は幼名「安次郎」といい、少なくとも20代前半頃までは「彌曾次郎」と称している。また文化人であった時冬は、「柳城」「年魚市人」などの号も使用している。
- ⁸ 社会経済史学 7-2,1937.
- ⁹ 時冬の同僚であった菅沼貞風(1865～89)は、南進論者として 著名である(赤沼三郎.菅沼貞風.博文館,1941. 武藤長蔵.跋.大日本商業史.岩波書店,1940. 有賀定彦.明治期における『南進』論の一系譜.東南アジア研究年報 26, 1984. など)。
- ¹⁰ 安丸良夫(佐々木潤之介分担執筆).日本史.一橋大学学問史.一橋大学,1986.p.1025.
- ¹¹ 増田四郎.一橋歴史学の流れ.橋間叢書 13,1982.
- ¹² 山田欣吾.西洋史.一橋大学学問史.p.989-990.
- ¹³ 工藤恭吉.横井時冬と早稲田大学.早稲田商学 249.1975.
- ¹⁴ 五味文彦.人物史の手法.左右社,2014. 若尾政希.安藤昌益からみえる日本近世.東京大学出版会,2004 など。また個人の役割を研究する上で、「個人αの活動によって歴史の流れが変わったか」「もし個人αの活動がなかったとしても、別の個人βが登場して同様の活動を展開し、ほぼ同様の歴史の流れが形成されたであろうから、αの個人的役割は限定的なものにとどまる」という反論への対応を常に考慮しなければならないとする、橋川武郎氏の指摘も重要である(松永安左エ門.ミネルヴァ書房,2004.)。
- ¹⁵ 横井時冬.大日本能書伝.吉川弘文館,1907.
- ¹⁶ 横井時冬著(横井春野編).日本商業史.の序文より。
- ¹⁷ 佐藤楚材(牧山)は、尾張を代表する漢学者の一人であり、伊藤博文の師としても知られる。
- ¹⁸ 横井弥曾次郎.愛知県中島郡地誌.横地幸補出版,1882.同書の序文は佐藤楚材(門生福岡欽崇)が、校閲を境野熊蔵(愛知県師範学校校長)、堀田司馬太郎(中島郡書記)が、それぞれ担当している。
- ¹⁹ 小杉楯郎.横井時冬君小傳.歴史地理 8-6,1939.
- ²⁰ 『読売新聞』(朝刊)、1888年5月2日。
- ²¹ 時冬と矢野二郎の関係については、島田三郎編「横井時冬の正直を愛して其能を画さしむ」(矢野二郎伝.矢野二郎翁伝記編纂会,1913.)を参照。
- ²² 杉岳志「東京高商の修学旅行とその報告書」(一橋大学附属図書館研究開発室年報 1.2013.
- ²³ 松沢裕作.久米邦武と重野安繹.山川出版社,2012.
- ²⁴ 猪谷氏前掲論文参照。
- ²⁵ 時冬没後すぐに 高等商業学校同窓会誌 45,1906.に掲載された時冬の諸傳には、「明治二十三年二月第三回内国勸業博覧会同校出品取調掛兼務命ぜらる」とある。
- ²⁶ 読売新聞(朝刊)、1890年3月24日。
- ²⁷ 読売新聞(朝刊)、1890年4月20,21,28日。
- ²⁸ 一橋大学附属図書館史.一橋大学.1975.p.15.
- ²⁹ 明治36年頃の「図書館委員会決議案」が残されている(一橋大学附属図書館蔵)。
- ³⁰ 明治26年に時冬が、多羅尾忠郎の『千島探検実紀』などを附属図書館に寄贈していることは、彼の国際認識・商業教育観を考える上でも重要であろう。
- ³¹ この点、「制度」のなかにおける主体の位置に着目する松沢裕作氏の方法論に多く学んだ(明治地方自治体制の起源.東京大学出版会,2009.)。
- ³² 時冬は、幕府による土地売買禁制の厳格さを批判し、「今上天皇即位五年二月十五日ノ布告ヲ以テ四民共地所永代売買ヲ許サル徳川氏土地ノ売買ヲ禁セシヨリ二百五十余年ニシテ土地売買ノ自由ヲ回復シタルモノナリ」(p.211)としている。

-
- ³³ 加藤悠希.明治前半期における過去の武家邸宅像について.学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠,2011.
- ³⁴ この点、消息文変遷.金港堂,1894. の「緒言」でも「維新の際、西洋の文物、一時に入来り、国語国文の破壊せられたると同時に、消息文も亦大に破壊せられ、或は漢語を濫用し、或は洋語を挿入し、或は言文一致やうのものあり」などと述べている点も注目される。
- ³⁵ 一橋大学附属図書館蔵。
- ³⁶ 西堀一三.横井時冬博士（横井時冬.日本庭園発達史.創元社,1940.）。
- ³⁷ 小杉楹邨.横井時冬君小傳.歴史地理.8-6,1939. 小杉によれば、早稲田在学中の時冬は、「本来わが国体の世界無比なる天皇陛下を、僥倖にもいただき奉る国民は、いやしくもわが建国の大体を、心に認るを得ざれば、一日も事業に従ふを得じろの意見」をもっていたという。
- ³⁸ 福田徳三.我邦中古商業の『座』.福田徳三全集 第3集.同文館,1925（初出 1911）所収論文。
- ³⁹ 明治37年9月、杉山令吉が早稲田大学図書館に写字生を採用するように申し込みをする際に、時冬がその仲立ちとなっている（藤原秀之.知られざる図書館員 三木武吉.ふみくら78,2010.）
- ⁴⁰ 朋壺尺東（早稲田大学図書館へ 10 01320）早稲田大学図書館古典籍総合データベース http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he10/he10_01320/ 2014年9月30日閲覧。
- ⁴¹ 『日本商業史』の序文に掲載された明治26年3月の三上参次の文章（pp.1-2）より引用（横井時冬.日本商業史.白揚社.1926.）
- ⁴² 一橋大学附属図書館蔵（毛筆本）、貴X290。このほかに、『為替考』『徳政考』『屋号考』などがある。
- ⁴³ 時冬の弟子には、のちに長崎高等商業学校教授となる武藤長蔵（1881～1942）がいる。武藤は、時冬について小伝を記しているが（恩師を偲ぶ.如水会々報 200,1940. 菅沼貞風.跋.大日本商業史.岩波書店,1940. なお、この資料の存在については、大場高志氏よりご教示いただいた）、長崎関係の資料が一橋大学附属図書館に納められた理由の一つには、時冬の弟子武藤長蔵の存在もあったと考えられる。
- ⁴⁴ 佐佐木信綱.明治文学の片影.中央公論社、1934.
- ⁴⁵ 読売新聞（朝刊）、1906年4月23日。
- ⁴⁶ 高等商業学校同窓会誌（1906年）の広告を参照。
- ⁴⁷ 廣木尚.黒板勝美の通史叙述.日本史研究 624,2014.
- ⁴⁸ 長谷川亮一.「皇国史観」という問題.白澤社,2008. 昆野伸幸.近代日本の国体論.ペリかん社,2007.など。

【論文】

横井時冬論— 商人・職人を中心とした、もうひとつの「国史」研究の可能性 —

夏目琢史（一橋大学附属図書館研究開発室）

要旨

本稿は、東京高等商業学校教授 横井時冬の歴史観に注目したものである。時冬は日本商業史研究の先駆的な存在であり、とくに個別の実証に優れた研究者であったが、これまで彼自身についての本格的な研究はなされてこなかった。本稿では、時冬が商業学校の教員として、常に国際的な視野を持ちつつ、海外を見据えて活動した江戸時代の優れた商人たちの研究を進めていたことなどを明らかにした。

キーワード

高等商業学校、日本商業史、横井時冬、商人、職人

[Article]

Study of Tokifuyu Yokoi

Natsume, Takumi

Research Development Office, Hitotsubashi University Library

Abstract

This report paid attention to outlook on historical view of Tokifuyu Yokoi, professor at Higher Commercial School. Tokifuyu was a superior positivist, and the pioneer of the history of Japanese commerce. But there are few studies about Tokifuyu's studies and himself. In this article, it became clear that he pushed forward the study about merchants, who played an active part abroad, as the teacher of the commercial school. Therefore, it can be said that he always had international perspectives as background of his studies.

Keywords

Higher Commercial School, History of Japanese commerce, Tokifuyu Yokoi, Merchant, Craftsman